

# 加速主義

〈増補新版〉

ニック・ランドと新反動主義

木澤佐登志

イーロン・マスク、J・D・ヴァンス、ピー

ター・ティール——トランプ政権とシリコン

バレーに靈感を与える最尖鋭の現代思想

の起源から未来までを解き明かす解説書!



加速主義

増補新版

ニッケ・ランドと新反動主義

木澤佐登志

星海社

362



SEIKAISHA  
SHINSHO



新反動主義の継承者、J・D・ヴァンス

2025年1月、ドナルド・トランプの大統領就任式が行われた週末、カーティス・ヤーヴィンは首都ワシントンD.C.を訪れていた。ウォーターゲートホテルのボールルームで開かれる超保守系出版社Passage Press主催の「戴冠たいかんの舞踏会」に向かうためだ。これはトランプ再選の波に乗り権力を得た新たな保守系カウンターエリートの台頭を寿ぐことほ催しであり、その思想形成にもっとも貢献した人物と目されるヤーヴィンは、非公式ながら主賓しゅひんとして迎えられていた。<sup>\*1</sup>

同月、アメリカの政治専門ニュースメディア『ポリティコ』は、「カーティス・ヤーヴィンの思想はかつて傍流と見なされていた。しかしそれらは今や、トランプ政権下のワシントン徘徊はいかいしている (Curtis Yarvin's Ideas Were Fringe. Now They're Coursing Through Trump's Wash-

\*1 <https://www.politico.com/news/magazine/2025/01/30/curtis-yarvin-ideas-00201552>

ington)」と題した、ヤーヴィンのインタビュー記事を公開した。

その中で、ヤーヴィンはインタビューに次のように語っている。

選挙後にヴァンスと会ったのは一度だけだ。彼は「ヤーヴィン、お前は反動的ファシストだな」と言ったので、私は「ありがとうございます、副大統領閣下。あなたの当選を阻はばまなくて済んでうれしいです」と返したよ。<sup>\*2</sup>

J・D・ヴァンス。アメリカ合衆国の政治家・作家・弁護士・元海兵隊員にして、2025年からトランプ政権第二期において副大統領を務める人物。「ラストベルト（錆びついた工業地帯）」に住む白人労働者階級、言い換えれば「アメリカの繁栄」から取り残された人々の窮きゆうじよう状と怒りを描いてベストセラーとなった回想記『ヒルビリー・エレジー』の著者としても知られる。

かつて鉄鋼業が栄えていた地域、オハイオ州南部の地方都市ミドルタウンに生まれ、両

親の離婚後、不安定な家庭環境（母親の薬物依存や度重なる同棲・再婚）と度重なる転居を経験。高校卒業後の2003年、海兵隊に入隊シラク戦争に従軍。帰還後、オハイオ州立大学で政治学と哲学を学び、その後イェール大学ロースクールでJ. D.（法務博士）の学位を取得している。

在学中の2011年、ヴァンスに大きな転機が訪れる。ピーター・ティールとの出会いである。それはティールの講演を聞いたことがきっかけだった。ティールはその講演で、シリコンバレーが真に革新的な技術を生み出していない現状を、アメリカの政治的・社会的エリートの停滞と結びつけて論じた。ヴァンスは後にティールのビジョンについてこう記している。

彼は二つの傾向——過度な競争に閉じ込められたエリート職業人たちと、社会における技術的停滞——がつながっていると見ていた。もし技術革新が本当に繁栄を生んでいるのなら、エリートたちは巨大だったはずのパイがみるみる小さくなっていく中で互いにパイを巡って争い続けることはなかったはずだ。<sup>\*3</sup>

\*3 <https://www.politico.com/news/magazine/2024/07/18/jd-vance-world-view-sources-00168984>

この講演に感銘を受けたヴァンスは、後に次のように回想している。

ピーターの講演は、イエール大学（原文より）ロースクール時代の私にとって最も重要な瞬間として今なお残っている。彼はそれまで漠然として形にならなかった感覚を言語化した。つまり、私は「意味ある何かの終着点のため」ではなく、“それ自体として (in se)” の達成に取り憑かれていたのではないだろうか、という感覚を。私が「努力を人格（性格）よりも優先させてしまったのではないか」という不安は、より重い意味を帯びた——“何のための努力なのか？” 自分がなぜ自分の気にしている事柄を気にしているのかさえ分かっていなかった。私は自分を教養ある、啓発された、そして世界の有り様について特に賢い人間だと気取っていた——少なくとも郷里の大半の人と比べれば。ところが私は、実際には理解してもない専門的な資格——連邦判事の事務官職、そして名高い法律事務所でのアソシエイト職——を手に入れることに強迫的だった。法実務にわずかに触れた範囲でさえ本当は嫌っていたというのに。将来を見やると、第一等の賞品が「自分の嫌っている仕事」であるようなレ-



スを必死になって走ってきたのだと悟った。<sup>★4</sup>

ティールから靈感を受けたヴァンスは、すぐさま法曹界のキャリアからドロップアウトする計画を立てる。結果、2016年にティールが創業したベンチャーキャピタル（VC）に転職することになる。『ヒルビリー・エレジー』は同年に出版され、推薦文を書いたのは誰あろうティールであった。

ヴァンスは2021年、上院議員選へ出馬表明をしたが、ヴァンスを支援する政治団体に約1000万ドルの寄付を行ったのもティールだった。選挙資金とティールに紹介されたドナルド・トランプの支持を得て、ヴァンスは2022年にオハイオ州選出の上院議員となった。

一方で、ヴァンスがヤーヴィンの思想を知ったのもこの頃のことだったと思われる。2021年に右派系ポッドキャスト（Jack Murphy Live）にヴァンスが登場した際、彼はヤーヴィンの名を挙げ、その思想——アメリカ民主主義は修復不能であり、シリコンバレーのス

タートアップ型君主制に置き換えるべきとする思想、詳しくは本文第2章で詳述——を紹介しつつ、現行体制が自壊する可能性と行政国家への対処（解体か掌握か）について自身の見解を述べた。

それだけにとどまらず、もしドナルド・トランプが再選されたら連邦官僚制度をどう刷新すべきかについて持論を展開する中で、ヴァンスは次のように語った。

もし私がトランプに「ただけ助言できるとしたらこう言うでしょうね。行政国家に属する中間層の官僚を全員クビにして、我々の側の人間と入れ替えろ。裁判所がそれを止めようとしてきたら、国民の前に立ってこう言えばいい。『最高裁長官が判決を下した。では、それを執行してみせろ』と。<sup>\*5</sup>

この「助言」は、実のところヤーヴィンが2012年頃に打ち出した提案「すべての政府職員を退職させよ (Retire All Government Employees、略してRAGE)」とほぼ同一である。ヤ

ーヴィンによると、RAGEの目的は、政府を「全能の執行権力」の下で再起動（リブート）すること、すなわち一種の「デバッグ」である。ヤーヴィンは選挙や民主主義を政治変革の手段としては非効率だと見なしている。というのも、国家元首やその任命する幹部が交代しても、実際に政策を動かしていると彼が考えるキャリア官僚たちはそのまま居座るからだ。2012年のスピーチにおいて、ヤーヴィンは「アメリカ人が本気で政府を変えないなら、独裁者恐怖症を克服しなければならない」とぶち上げていた。その後、ヤーヴィンは「独裁者」という言葉遣いは控えるようになり（最近では「万人のための君主制」と称している）、語調はやや穏やかになったが、その根本的な主張は変わっていない。ヤーヴィンにとって、民主主義は幻想である。選挙は人々に「自分たちが政治に関与できている」と思わせる装置にすぎず、実際には「カテドラル（Cathedral）」——主流メディアや名門大学といったリベラルなエリート知識層のネットワーク——がすべてを支配している。すなわち、この理論にあつて、唯一推奨される政治体制は君主制に他ならない。<sup>\*6</sup>

アメリカのテック系メディア『The Verge』は、2024年の記事の中で、オンライン上

でヴァンスの思考にもっとも影響を与えた人物の名にヤーヴインを挙げ、もしトランプが再選されれば、ヤーヴインの RAGE（全政府職員の退職）構想が再び現実味を帯びるかもしれない、という懸念を示しているが、その懸念はどうやら現実化しつつある。<sup>\*7</sup>

2019年、私が本書『ニック・ランドと新反動主義』を執筆していた時点では、この本で言及しているティールやヤーヴイン、そしてニック・ランドらが唱える思想、すなわち新反動主義、右派加速主義、暗黒啓蒙といった諸思想は、未だ周縁的かつアンダーグラウンドなオンライン右派サブカルチャーの次元に留まっていた。それらは、漆黒の装丁が似つかわしい、禍々<sup>まがまが</sup>しくて得体のしれない、さながら闇の思想めいて……。

しかし、2025年現在、これらの思想は太陽の光が降り注ぐ中、大手を振ってメインストリートを練り歩いているように見える。ティールやヤーヴインが構想するビジョンは、今や国家の中枢にまで入り込み居場所を見出している。たった数年で、状況はあまりに大きく変化してしまった。

こうした状況の変化を検討する上で、新たにキーパーソンとして浮上してきた人物が二

人いる。それは、トランプ政権第二期における副大統領J・D・ヴァンスと、世界一の富豪イーロン・マスクである。

### ダークエルフの台頭とプロトピア

ヴァンスは、ティールとヤーヴィンから影響を受けているという点で、新反動主義を受け継いだ思想をホワイトハウスの中枢に持ち込んだことになる。ティールは2024年の大統領選でも、ヴァンスを副大統領候補としてトランプに推薦している。

ヴァンスは2024年初頭に、『ポリティコ』のインタビューの中で、「ピーターとの関係は、私が彼を知ってからほぼ15年間変わっていません。何か面白いことがあって、それについて非常に博識で魅力的な人と意見を交わしたくなったときには、彼に電話をかけるんです」と語っているように、一貫してティールはヴァンスの師でありメンターであり続けている。<sup>\*8</sup>

ティールもヴァンスも、エリートでありながらエリートを批判する。彼らのような存在

\*8 <https://www.politico.com/news/magazine/2024/03/15/mr-maga-goes-to-washington-00147054>

を「カウンターエリート」と呼ぶ論者もいる。石田健『カウンターエリート』によれば、カウンターエリートには、たとえば以下のような定義が含まれる。「カウンターエリートは、現行システムへの問題意識を共有している。特に政府や官僚機構、メディア、学術界などを『既得権益化したエリート』とみなし、攻撃する」\*9。

ここでの「既得権益化したエリート」は、ヤーヴィンが批判する「カテドラル」に近い。この点について、冒頭のインタビューの中で、ヤーヴィンがみずから『指輪物語』のトールキン風に解釈した「ダークエルフ」に見立てているのは興味深い。

ヤーヴィンによれば、米国社会は「青い州（民主党を支持する州）の統治側エリート＝エルフ」と「支配される下層中産階級＝ホビット」に分断されている。しかし、教育や家柄ゆえにエルフ側に属しながら（大学とはヤーヴィンに従えば「エルフ貴族」を輩出する仕組みに他ならない）、自身のようにオバマ的進歩主義の「国教」を信じなくなったダークエルフも一定数存在している、と述べる。<sup>\*10</sup>

近年のシリコンバレーにあつて、ダークエルフの存在はもはや傍流でないことを、図ら

\*9 石田健「カウンターエリート」、文藝春秋、二〇二五、九頁。

\*10 前掲、<https://www.politico.com/news/magazine/2025/01/30/cutis-yarvins-ideas-00201552>

ずも大統領就任式は証し立てた。就任式の壇上、演説するトランプの背後に美しい半円を描くように居並んだのは閣僚(？)したダークエルフたち、すなわちイーロン・マスク、ジェフ・ベゾス(アマゾン創業者)、サンダー・ピチャイ(グーグルCEO)、マーク・ザッカーバーグ(メタCEO)、ティム・クック(アップルCEO)、セルゲイ・ブリン(グーグル創業者)、といったシリコンバレーのビッグテックを代表する面々。コリイ・ドクトロウがいみじくも述べるように、その光景はテクノロジ企業が民主主義(あるいは民主党)の味方であるというオバマ時代の幻想に最後の楔くさびを打ち込むものであった。<sup>\*11</sup>

バイデン政権はシリコンバレーのビッグテックを敵視していた。民主党の「反ビジネス」の姿勢が際立っていたことから、シリコンバレーには不満のマグマが溜まっていた。そのため、彼らはリベラルな理念はひとまず脇に置き、稼がせてくれるトランプにシフトした、といった論調も見られる。<sup>\*12</sup>

だが、果たして本当にそうだろうか。元々リベラルであったシリコンバレーが気まぐれのように突如「転向」したというよりは、むしろシリコンバレーに長く伏在していた「ダ

\* 11 <https://2p2k.org/monopoly/5388>

\* 12 小林泰明「トランプと「テック・オリガルヒ」との危険な関係」、『世界2025年5月号』、岩波書店、二〇二五、二〇四頁。

「クエルフ」的な側面が、トランプ再選とともに機が熟するのを待っていたかのように顕在化しただけにすぎない、とも言えるのではないか。その意味では、ティールやヤーヴィンは決して例外的な存在ではない。

たとえば、シリコンバレーのスタートアップにおけるホモソーシャルなボーイズ・クラブ文化はそれまでもたびたび批判されてきた。アメリカのジャーナリスト、エミリー・チャン (Emily Chang) は2018年に出版した著書『プロトピア…シリコンバレーのボーイズクラブを解体する (Brotopia: Breaking Up the Boys' Club of Silicon Valley)』(未邦訳)の中で、メリトクラシー(実力≡業績主義)神話が既存ネットワーク(白人/アジア系男性中心、特にエリート大学出身・特定企業アルムナイ)の相互再生産を隠蔽<sup>いんぺい</sup>しており、そのことが「ダイバーシティ推進」などのリベラルなアジェンダを掲げる一方で、性的嫌がらせ、投資判断における性差バイアス、女性の極端な少数性(特にエンジニア職・VCパートナー職)といった実態を放置してきた、と批判する。ちなみに著書タイトルの「プロトピア (Brotopia)」とは、bro ≡ 男子的・フラタニティ的社交文化と utopia ≡ ユートピアを掛け合わせた合成語。チャンは、シリコンバレーのパーティー文化(そこには「密室」で行われるセックスパーティーも含まれる)を批判する文脈の中で次のように述べる。



（パーティーの中で）ベンチャーキャピタルは将来資金提供するかもしれない起業家と交流し、CEOは在籍中あるいは未来の従業員と出くわすかもしれない。しかしパーティーに参加する男性が、社交しながらビジネスを進める利得を十分享受できる一方で、女性は参加すれば（性的に）客体化されるリスクを負い、参加しなければ締め出されるリスクを負う。<sup>\*13</sup>

ブロトピア、それは外面こそ革新やDEI（多様性、公平性、包括性）を標榜するが、その内実はBoo（閉鎖的な男性仲間集団）が規範と資源を独占するテック秩序に他ならない。同時に、こうした特権的な交友圏と富を誇示する閉鎖的な仲間意識は、メリトクラシーと根強く結びつきながら排他的な「道徳的例外主義」となって顕在化する。『ブロトピア』の中で、とある元グーグル幹部は次のように著者に語る。

「[中略] 確かに、富は人を変え得ます」とその元グーグル幹部は言った。「それはあなたを

\*13 Chang, Emily. *Protopia: Breaking Up the Boys' Club of Silicon Valley* (English Edition) (pp.11-12). Penguin Portfolio. Kindle 版。

“普通の人々”から切り離してしまう。これは非常に大きな問題です。自分の経験が皆の経験だと想定するようになり、富があるとそれはいっそう危険になる。道德面における“自分たちは例外だ”という思い上がり（moral exceptionalism）は気分が悪くなるほどで、シリコンバレーにはそれが山ほどありますし、その根は共感力の欠如にある。自分と同じ世界観を持たない人々は無知か愚かだと決めつけてしまうのです。<sup>\*14</sup>

シリコンバレーのこうした道德的例外主義者たちは、女性が大幅に排除されてきた事実を正当化するために、みずからの大成功をしばしば利用する。メリトクラシーという理念を英雄視することで、シリコンバレーは多様性の欠如が問題であることを否認できるわけだ、とチャンは指摘する。

道德例外主義（moral exceptionalism）、言い換えれば自分たちは一般的な倫理規範の適用対象外の「特別」な存在であるという思い上がりは、シリコンバレーの特異なハッカー倫理

\*14 同右（pp.12-14）.

と結託しながら、スタートアップ文化とテックエリートを現在に至るまで押し上げてきた。英国出身・米国育ちのプログラマ兼エッセイストであり、ドロップボックス (Dropbox) などを生み出したVCであるYコンビネーター (Y Combinator) の共同創業者としても知られるポール・グレアムは、2004年にシリコンバレーのスタートアップ／ハッカー文化に大きな影響力を与えた正典『ハッカーと画家』を上梓している。その中に、ハッカーとオタク (ナード) の類縁性が「賢さ」と「不人気者」との共通性から論じられるチャプターがある。たとえば、以下のような文章。

私の知り合いには学校時代にオタク (nerd) だった人がたくさんいるが、皆同じ話をする。賢いこととオタクであることの間には極めて強い相関があり、オタクであることと人気者であることの間にはもっと強い負の相関があるというものだ。賢いとむしろ不人気者になるみたいなんだ。<sup>\*15</sup>

\*15

ポール・グレアム「ハッカーと画家 コンピュータ時代の創造者たち」川合史朗訳、オーム社、二〇〇五、七頁。

私に通っていた学校では賢いことは単に重視されなかった。「中略」頭の良さは他のもの、外見とか魅力とか運動能力に比べたら、ずっと軽視されていた。<sup>\*16</sup>

誰かに、一番の人気者にしてやる、その代わりに知能指数は並（笑）で我慢しろ、と言われたとしても、その取り引きには応じなかっただろうと思う。

人気がないことでいくら苦しんでいても、多くのオタクはその取り引きに応じないはずだ。並の頭になることはオタクにとっては耐え難いことだからだ。でも普通の子供なら応じるだろうと思う。<sup>\*17</sup>

すなわち、自分たち「ハッカー」オタク」は「普通の奴ら」よりも賢いがゆえに迫害され、不人気者の地位に甘んじているのだ、と。そして、たとえ不人気者になっても、それでも「賢さ」知能指数」を選び取る。なぜなら並の頭（笑）になることは「自分たち」にとって耐え難いことだからだ、と。

ここには明らかに「普通の奴ら」ノーマー（normie）」に対するメリトクラシー的な優越

\*16 同右、八頁。

\*17 同右、八頁。

主義と、その裏返しとしての歪んだ被害者意識が見え隠れしている。

またグレアムは、「ルールを破る人々が、アメリカの富と力の源である」とも述べる。

ハッカーは規則に従わない。それがハッキングの本質なんだ。それはまた、アメリカ的であることの<sup>\*18</sup>本質でもある。

たとえば、「グロウス・ハッキング (Growth Hacking)」と呼ばれる戦略がある。主にスタートアップや小規模企業が、限られたリソースで効率的に成長を実現するためのマーケティング手法や戦略を指すが、「ハック」と名付けられているように、中には法を逸脱したり倫理的に疑問視される手法を使うこともある。だが、こうした世間的に見てグレーな手法はシリコンバレーのテック<sup>かいわい</sup>界限ではむしろ称賛されることすらある（ティールもペイパル時代にグロウス・ハッキングを行っていた）。<sup>\*19</sup>

「ハッカーは規則に従わない。それがハッキングの本質なんだ」というフレーズには、シ

\*18 同右、五八頁。

\*19 マクス・チャフキン「無能より邪悪であれ ビーター・ティール シリコンバレーをつくった男」永峯涼訳、サンクチュアリ出版、二〇一四、八六頁。

リコンバレーのテック文化に対する行動指針が含まれているとともに、みずからを「普通の奴ら（ノーマー）」から切り離して「例外」に位置づける、あの道徳例外主義がすでに見え隠れしている。同時に、俺たち「例外」こそがもっとも「アメリカ的」なのだ、という啖呵も今や私たちにとっては、つまり「MAGA（アメリカを再び偉大に）」を唱えるトランプの大統領就任式に集まったテックエリートたちを見てきた私たちにとってはむしろ当然に見えてくる。

それだけではない。「普通の奴ら」の規則に従わない道徳例外主義は、必然的にポリティカル・コレクトネス（政治的公正）に対する「逆張り」を導き出す。

素晴らしいハッカーと、一般的に賢い人々との間の違いとして私が気付いたのは、ハッカーはより「政治的に正しく」ないということだ。良いハッカーの間での、秘密の握手みたいなものがあるくらいだ。ハッカー同士が十分に親しくなると、一般の人が聞いたら啞然としすぎて死んでしまうくらい恐ろしいことを平気で言い出し始めるのがそれだ。<sup>\*20</sup>

\*20 前掲書、「ハッカーと画家」、二三八頁。

ハッカーにとつて、「ルールを破ること」と「政治的に正しくないこと」は、一般人が思  
いも寄らないイノベータータイプな創造性に繋がるがゆえに肯定される。だが上の引用文から  
は、ダイバーシティを推進する裏側でポリティカル・コレクトネスを嘲笑する閉鎖的なボ  
ーイズ・クラブ性、すなわちシリコンバレーに<sup>びまん</sup>に瀰漫するプロトピア的エートスもまた透け  
て見えてくる。

一方で、最近では「プロトピア」に代わつて「ブロリガキ（broligarchy）」という造語も  
使われるようになってきている。これは、少数のタフな男性テック起業家たちが政治を支  
配する寡頭制を意味しており、シリコンバレーの価値観や文化が今や国家政治の領域にま  
で分け入っている現状を指し示している。<sup>＊21</sup>

アメリカはもはや偉大ではない

シリコンバレーのテックエリートがポリティカル・コレクトネスに唾を吐きかける光景

＊21 橋本努「テック起業家たちのイデオロギー」、『世界 2025 年 5 月号』、岩波書店、二〇二五、一七五頁。

はもはや珍しいものではなくなった。ピーター・ティールは言うまでもない。彼は2016年7月、共和党全国大会に登壇してスピーチを行った際、トランプ支持者の聴衆に向かって次のように発言した。自分の少年時代、「世の中で議論的になっていたのは、どうやってソビエト連邦を負かすかだった」「今、大きな議論になっているのは誰がどのトイレを使うべきかについてだ。われわれが抱えている本当の問題から注意をそらしているだけだ」。<sup>\*22</sup>

テクノロジー産業が衰退し、アメリカが未来を実現させる野心を持たない国になってしまったことの原因は、ポリティカル・コレクトネスやダイバーシティを喧伝する新左翼や民主党にあるとティールは本気で信じている。そしてトランプこそは、この停滞した現状を作り出した体制を破壊してくれる救世主に他ならない、と（ティールと文化戦争の関わりについては本書第1章にて詳述）。

ティールの主張する「われわれが抱えている本当の問題」とは、アメリカが技術的／経済的に停滞しているという現実とイノベーションの欠如、一言で言えば「未来の喪失」で

\*22 前掲書、「無能より邪悪であれ」、三〇二―三〇三頁。



ある。ティールがトランプを支持する理由のひとつは、彼にとってトランプは「アメリカの停滞」を正しく認識している数少ない政治家の一人だからだ（ティールに従えば、「MAGA（アメリカを再び偉大に）」のスローガンには「アメリカはもはや偉大ではない」という含意が込められている）。

第二次世界大戦中のマンハッタン計画から60年代のアポロ計画に至るまで、アメリカには「未来」を創造する力があつた。「未来」を創造する力、それは言い換えればイノベーションを生み出す力でもある。アップルのパーソナルコンピュータに象徴されるように、シリコンバレーは0から1を、すなわちイノベーションを生み出す揺籃地ようらんであつた。

だが、いつからかティールはシリコンバレーを見限るようになった。なぜなら、「私たちが本当に手にしたかつたのは空飛ぶ車なのに、手にしたのはたった140字だった」から。アメリカはもはや0から1を生み出す力を、イノベーションを起こす力を持っていない。だからこそ停滞を生み出す現状の構造は破壊されなければならない。

前掲『カウンターエリート』で石田は、従来の「右派／左派」という対立軸に代えて「破壊主義／現状維持主義」という軸を導入すべきだとする見方を紹介している。これによれば、今日のアメリカでもっとも重要なのは、国に根本的な欠陥があり事態は緊急だとみな

す立場と、そうは考えない立場の対立である。<sup>\*23</sup> ティールやヤーヴィン（それに加えてイーロ  
ン・マスクやJ・D・ヴァンス）は言うまでもなく前者だ。

彼ら破壊主義者たちは、「現在の制度、エリート、知的・文化的生活、そして私たちの多  
くが頼りにしているサービスの質が空洞化している」として、「アメリカのエスタブリッシ  
ュメント（支配層）は、安定をもたらす力ではなく、肥大化し腐敗した連邦政府と企業の権  
力が絡み合った存在であり、国全体を窒息させる脅威となっている」と考えている。<sup>\*24</sup> こう  
した世界観は、「カテドラル」のネットワークが国を支配していると主張するヤーヴィンら  
とも多く共通している。

### トップダウンかボトムアップか

ただ一方で、「破壊主義／現状維持主義」という対立軸では取りこぼされてしまう別様の  
対立軸もあるのではないか。それは突き詰めて言えば、破壊に対するアプローチの仕方、  
あらかじめ先取りして言えば「トップダウン／ボトムアップ」という対立軸である。

\*23 前掲書、「カウンターエリート」、八二頁。

\*24 同右、八二―八三頁。

# 新版まえがき 3

新反動主義の継承者、J・D・ヴァンス 3

ダークエルフの台頭とプロトピア 11

アメリカはもはや偉大ではない 21

トップダウンかボトムアップか 24

権威主義的リバタリアンの台頭 30

国家を解体する 33

プラットフォームの皇帝たち 36

# 1 ピーター・テイル

55

ピーター・テイルとは誰か 56

ルネ・ジラールへの師事 59

学内紛争にコミットする 63

主権ある個人、そしてペイパル創業へ 69

ニーチェ主義とテイル 78

暗号通貨とサイファーク 82

「イグジット」のプログラム 89

「ホラー」に抗う 92

啓蒙という欺瞞、そして9・11 96

## 2 暗黒啓蒙 101

リバタリアニズムとは何か 102

「自由」と「民主主義」は両立しない 109

カーティス・ヤーヴィンの思想と対称的主権 112

新官房学 122

反近代主義とその矛盾 128

人種問題から「生物工学の地平」へ 136

## 3 ニック・ランド 143

啓蒙のパラドックス 144

ドゥルーズ&ガタリへの傾倒 150

コズミック・ホラー 157

## 4 加速主義

205

グレートフィルター仮説 160

クトゥルフ神話とアブストラクト・ホラー 164

死の欲動の哲学 171

CCRUという実践 176

CCRUとクラブミュージック 180

ハイパーステイション 186

思弁的実在論とニック・ランド 190

カンタン・メイヤスー 193

レイ・ブラシエ 198

ニック・ランドの上海 200

加速主義とは何か 206

# 加速主義…再考

265

左派加速主義とマーク・フィッシャー 213

右派加速主義、無条件的加速主義 220

トランスヒューマニズムと機械との合一 225

加速主義とロシア宇宙主義 228

ロコのバジリスクと『マトリックス』 234

ヴェイパーウェイヴと加速主義 243

ヴェイパーウェイヴと亡霊性 249

ノスタルジーと失われた未来 256

未来を取り戻せ？ 259

かくして、加速主義はミームとなった 266

効果的加速主義の登場 270

イーロン・マスクとAGI 276

再帰型Ⅱフィードバックモデル 278

未来の四象限 284

あとがき 292

新版あとがき 299

参考文献 308



## はじめに

オンライン掲示板兼コミュニティのRedditに「ダーク・エンライトメント」(The Dark Enlightenment)というコミュニティが存在する。「暗黒啓蒙」と訳せるこのコミュニティには、2025年9月時点で2万5千人を超えるユーザーが参加している。トップページの概要には、「平等主義という進歩的な宗教から生じた近代世界の醜悪な情況について議論するための場所」であることが記され、「普遍的な欺瞞ぎまんが蔓延している時代においては、真実を語ることは革命的な行いとなる」というジョージ・オーウェルの言葉が引かれている。

トップページをスクロールするとコミュニティのユーザーが共有している思想についてのさらなる詳細な説明を読むことができる。その中には、たとえばヘカテドラル(The Cathedral)と彼らが呼ぶコンセプトが出てくる。彼らによれば、現代の世俗的な進歩主義は、ピューリタンのカルヴァン主義の末裔であり、この進歩主義の意匠をまとった宗教は、

政治家、ジャーナリズム、教育機関などを通じて社会に影響力を行使しているという。

こうした視点に基づき、彼らは「社会正義」や「平等主義」に矛先を向ける。彼らに従えば、こうした「道徳」観念は近代的な進歩主義という名の宗教が生み出している欺瞞にすぎない。対して、彼らは生得的な差異や能力に基づいたヒエラルキーに価値を認める。それ以外にも、近代以前の伝統的な文化や価値観には、それ相応の合理的な存在理由があると主張する。たとえば、文化は長い年月をかけてそれぞれ地理的に独立して熟成されてきた。それらは同一の価値観に基づき、隣接した文化と競合しながら、生き残った文化が文明を形成していった。だから、それらにはその社会や土地に根付いた、単なるイデオロギーを超えた必然性があるのだという。

ここから、民主主義という名の大衆迎合的なシステム兼イデオロギーの否定、そして独立した小都市国家が乱立する政治システムこそが最善であるという結論に至る。それら都市国家は企業的な競争理念によって運営され、住民は自由に所属する都市国家を選択することで都市国家の間で競争が発生するようにする。つまり、都市国家を運営する者は住民の要求に応え満足させるインセンティブが発生する……云々。

以上に記したこの奇妙な(?)思想は新反動主義、あるいは暗黒啓蒙と呼ばれる。新反

動主義の支持者には、たとえばドナルド・トランプ大統領の元側近スティーブ・バノンなどがおり、現在のオルタナ右翼と呼ばれる思想にも多かれ少なかれ影響を与えているとされる。本書は、主にこの新反動主義の形成に寄与したと思われる三人の重要人物——ピーター・ティール、カーティス・ヤーヴィン、そしてニック・ランド——にそれぞれフォカスを当てることで、新反動主義のエッセンスを取り出すことをさしあたりの目標とする。以下では本書の簡単な見取り図を提示しておこう。

第1章では、ペイパル創業者のピーター・ティールを取り扱う。彼がシリコンバレーで育んできたリバタリアニズム思想は、白人男性的なエリート主義と結びながら啓蒙と民主主義の否定に向かう。そして「自由と民主主義はもはや両立できると信じていない」と宣言するに至る。

第2章ではシリコンバレーの起業家カーティス・ヤーヴィンがブログ上で展開し、やがて新反動主義と呼ばれることになる思想を紹介し、それがイギリスの哲学者ニック・ランドの「暗黒啓蒙」へと繋がっていく流れを辿る。

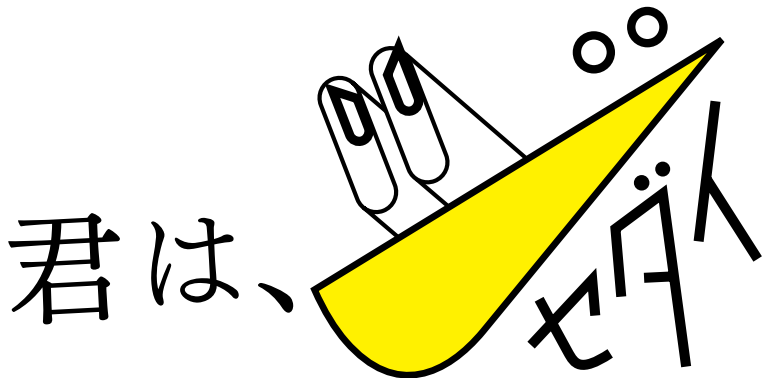
第3章では、ニック・ランドの思想的変遷を80年代から追っていく。その中で、90年代におけるCCRUという活動がその後の様々な潮流の源泉のひとつであることを確認する。

ダブステップ、思弁的実在論、加速主義……、これら現在にまで様々な影響を与えている諸潮流を取り出してみること、新反動主義に必ずしもとどまらない混沌とした思想地図を描きたい。

第4章では加速主義にフォーカスを当てる。資本主義に対する唯一のラディカルな応答は、批判でも抵抗でもなく、反対に資本主義のプロセスを限界まで推し進めることである、という態度に要約される加速主義は、マルクスを端緒たんしよとし、70年代のドウルーズ&ガタリ、そして90年代のニック・ランドにおいてひとつの頂点に達する。また、章の後半では、ヴェイパーウェイヴと呼ばれる音楽ジャンルを検討しながら、なぜこのような異端的な思想が現在でも一定のプレゼンスを得ているのかを探っていく。その過程で見えてくるのは「失われた未来」というキーワードである。

第5章（増補新版書き下ろし）では、ミームと化した現在の加速主義を俯瞰ふかんしつつ、「未来の四象限」を元にありうべき未来を模索する。

もとより、この小著で新反動主義や加速主義の全体像や系譜的流れをすべてカバーできるとは思っていない。それでも、この本が現在進行形の諸思想の見取り図に少しでも貢献できれば幸いである。



何と闘うか？  
<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、  
行動機会提案サイトです。読む→考える→行  
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ  
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう  
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

**ジセダイイベント**

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月  
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

**ジセダイ総研**

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。  
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

**星海社新書試し読み**

既刊・新刊を含む、  
すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

**行動せよ!!!**